



彦島八幡宮社報
第 47 号



『巻頭言』

宮司 柴田 宜夫

宮司の柴田です。平素は、氏子崇敬者の皆様には、当八幡宮運営に、又祭典行事等の齎行につきまして、格別のご配慮お力添えを頂きまして、心から感謝申し上げます。さて近代日本の思想(しそ)に大きな影響を及ぼされた、「善の研究」の著者(ちよしゃ)でもある哲学者の西田幾多郎(にした きたろう)氏は、「見えるものは見えざるものの影」とおっしゃいました。相田みつをさんも、「花を支える枝 枝を支える幹 幹を支える根 根はみえねんだな」という詩を残していらっしやいます。大事なものは、目に見えないのです。水道管やガス管、所謂(いわゆる)ライフラインも、地下深く埋められています。やはり私たちは、あたり前の出来事や普段の生活にも、心から「おかげさまで」と感謝することを忘れてはならないと思います。古語(こご)では、光の事を「かげ」と読ませました。光をあてられているからこそ陰(かげ)ができるわけで、実は、私どもの何気ない日常は、みえざるものの影である、「お光様」なのではないでしょうか。しかも、光にかかる枕詞(まくらことば)は、「たまゆらの」であります。「たまゆら」とは、瞬(まはたき)きをするほどの、ほんの一瞬という意味です。大自然に身をゆだね、謙虚(けんこ)につつましく生活をしていたわれわれの御先祖様は、光の速さが高速であることを察知(さつち)させられていたのでしょうか。インターネットなど高度な通信手段としても、光は、欠かせないものとなっています。命にかかる枕詞も、やはり、「たまゆらの」であります。気が遠くなるようなわれわれが住まわされている、この地球の生い立ち、まさに悠久の時間、永く果てしなく続いているわけです。その時間からしたら人の一生は、まさに、ほんの一瞬、「たまゆら」です。かけがえのないものなのです。人の死亡率は、百パーセント、必ず、ある地点で死にいたりします。吉田兼好(よしだ けんこう)は、徒然草(つれづれぐさ)に、「死を憎ばば生(しょう)を愛すべし存命(ぞんめい)の喜び日々(ひび)に樂しまざらめや」と記(しる)しています。今、ここに命があることに感謝をして、その感謝の心をつないでいく、これこそが、神社神道の神髓(しんずい)なのです。「生かされて生き活きて生きていく」、これこそが、吉田兼好のいうところの「存命の喜び」ではないかと思ひますし、まさに「生活」なのではないでしょうか。

宮城谷昌光(みやぎたにまさみつ)さん著作(ちよさく)の「風は山河より」、これは徳川家康の祖父で名君と称えられた清康から父の広忠に仕えた家臣である菅沼新八郎の三代の物語であります。その新八郎は、出家して「不春院(ふしゅんいん)」と名乗りました。なぜ、「不」という字を使ったのか、孫にあたる新八郎(菅沼の当主、後継ぎは新八郎を名乗ります)は考えます。この「不」に一を加えたと「丕(ひ)」になる、われわれ子孫に、どんな時にもしつかり根をはり一歩をふみださなければならぬ、そのことを伝えたかったのではという意味があります。「丕業(ひぎょう)」といえば、大きな事業という意味があるのです。四月から消費税も八パーセントになり、不安で不安定な暮らしぶり、さらに、不満も鬱積(うっせき)する昨今ではあります、見えないものの影、「お光様」と感謝して慎み深く、この「不」を「丕」にかえなければと思います。初心にかえり、一歩を踏み出し、「丕業」になるよう「生活」をしていきたいものです。

私も、円滑な神社の運営ができますのも、たくさんの方々の真心の賜物、「お光様」と感謝の心を忘れず、襟を正しておつとめ致します。今後ともお導きください。御自愛をお祈り申し上げます。



宮司プレス総集編

※91号～94号（要点抜粋）を総集編としてお届けします。
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第九十一号（平成二十五年十二月三十一日）

◇みなさんは、「数え年」ってご存知ですか。誕生日が来ていないと、満年齢より二つも多くなってしまう。誕生日が来ていないと、満年齢に二つプラスしますし、すでに誕生日が来ていても、ひとつプラスしなければなりません。満年齢と数え年が一致することは、ありません。忠臣蔵の大石内蔵助（おおいし くららのすけ）の長男であった大石主税（おおいし ちから）も、父親と同じく切腹を申し付けられました。数え年十三歳、元服前でありました。満年齢で十二歳か十三歳、小学校五、六年生であったのです。天晴（あつぱ）れなのであります。モラトリウムという言葉、ご存じですか。経済用語で、借りたお金を返す期限を延長し、猶予（ゆうよ）する期間のことですが、心理学では、大人になるまで猶予された期間のことです。豊かな社会では、モラトリウムが長いのですが、必ずしもそうではなかった戦前、戦中、戦後間もなくは、モラトリウムが喪失（そうしつ）された、失われた時代でした。そのような、モラトリウムが喪失された時代があればこそ、今の繁栄平和があることに思いを深くしなければならぬのです。

◇実は、日本人には、数字のゼロという観念がなかったそう。ゼロから始まるのではなく、からはじまるのです。ですから、生まれた年も、新しい年も含めて数えるので、満年齢と絶対一致しないのです。ゼロという数字の感覚をもつたのは、インド人だそう。コンピュータの最新技術者もインドの方が多く、それで、これも、ゼロの数字の感覚を持つ特性といえるのではないのでしょうか。それは、ゼロの数字を持たなかった日本人の特性とは、何でしょうか。

◇私は、それこそ、神社神道が大切にしている清浄、「清（きよ）め祓（はら）い」ではないかと思えます。神社神道では、特に、「外清浄（げしじょう）」と「内清浄（ないしじょう）」を大切にします。「外清浄」とは、過去と現在、今を清めるのです。お手水（てみず）をして参拝しますよね。神事には、必ずお祓いを受けますよね。これが、「外清浄」です。そして、お祈りをする、これが、「内清浄」で、未来を清めるのです。私は、つまり、誕生日が来ていない満年齢が過去であり、誕生日を迎えた満年齢が現在、「外清浄」で、ひとつ多くなっている数え年が、未来、「内清浄」だと考えるのです。ですから、数え年には、神社神道で最も大切な「外清浄内清浄」が、こめられているのです。御婦人方にとりましては、「アンチエイジング、抗加齢（こうかれい）」の流れに相反することから、承服出来かねるかもしれませんが、そのような思いが、数え年には込められていると思えます。

◇天皇陛下は、元日の午前五時半から、最も重要なお祭りの一つであり、天皇お一人だけでできない「四方拜（しほうはい）」を御奉仕にされます。平安時代の初期から始められた千年以上の歴史があり、国家の安泰と国民の幸福を祈られます。世界には二十以上の君主国が存在しますが、常に国民の幸福と国家の安泰を祈り続けられる君主など他にはおられません。これからも、万世系の天皇陛下を仰ぐ日本人としての誇りを忘れずに「一意専心、微力ながら、御奉仕申し上げます。

第九十二号（平成二十六年二月三日）

◇今年も九百通あまりの年賀状をお出ししました。全部で十六種類、自筆したもの、三十枚ないし四十枚程度、オフセットの印刷機、輪転機で印刷しました。「大和心」「神喜地喜人喜」「則天去私」「日清日新日進」「天長地久」「柏葉寿」「日々是好日」「四海生春風」「賀新正」「延寿万歳」「三感四恩」「明浄正直勤務追進」「敷島の大和心を人問はば 朝日ににほふ山桜花」「神信心」「神道といふは人々日用の間にあり」の十五種類です。

◇今年は特に、「則天去私」「神喜地喜人喜」を、番多く印刷しました。則天去私（そくてんきよし）とは、夏目漱石が残した言葉で、人としての本来の姿を意味します。目には見えないけれど、大切なかけがえのない大自然に身をゆだね、私利私欲をかなぐり捨てて生きていくことです。まさに、雨奇晴好（うきせいこう）、降るもよし晴れるもよしという、とらわれない心で、何事も対処していくということですね。内憂外患（ないゆうがいかん）の世相であればこそ、則天去私の心を生活の心掛けにしたいものです。「神喜地喜人喜」、これは、私の造語（ぞうご）であります。私の御奉仕の指針、モットーで、神様を喜ばす心で地域の人々も笑み栄える社会であってほしいと願いつつ、鳥居の内の祭典行事は言うまでもなく、鳥居の外の地域社会へも微力ながら尽力するという神様とお誓い（ちかま）いあります。

◇今年、二月二日に「書初め」をさせていただきました。「午年（うまどし）」にあやかり、迷うことなく「馬」と書きました。これは、誤字（ごじ）誤植（ごしょく）ではありません。さて、何と読むでしょうか。実は、馬の漢字を左右引くり返して書いた字を「左馬（ひだりうま）」と言います。馬は、左から乗ると絶対に倒れないという言い伝えがあります。そのことが、「左うちわ」、「右に出る者がいない」に通じ、縁起が良いとされるのです。馬は、人が引かなければなりません。この左馬は、馬が運であるとか客を引っ張ってくる、「千客万来」なのです。開運招福を象徴する字なのです。午年は、経済が不況におちいりやすい年回りです。昭和二十九年の世界恐慌、平成二年のバブル崩壊などですね。この左馬という縁起のいい字にあやかり、益々繁盛してほしいという願いを込めて認（した）めたのです。

◇神様が、お喜びになられる心、「則天去私」の心で、「神喜地喜人喜」、地域もそこに暮らす人々も喜び笑み栄え、運命共同体としての地域社会になりますように、つとめてまいらねばと思いを新たにしています。本年も大神様の御加護によりまして、幸多く、さらに「繁栄」隆昌（りゅうしょう）でありますことを心からお祈り申し上げます。

第九十三号 (平成二十六年三月七日)

◇一月は、「行く」、二月は、「逃げる」、三月は、「去る」といわれていて、歲月(さいげつ)の流れが加速する時期なのだそう。しかしながら私は、加齢(かれい)とともに、時の流れの速度が増しているような気がしてなりません。「もう三月」なのであります。皆様方は、どのように感じでしょうか。「年寄りの二年は、早い」という人々の実感を、心理学で説き明かしたのが、「ジャーネの法則」なんだそうです。十九世紀のフランスの哲学者でもあり作家のポール・ジャネーという方が、説きき明かした法則です。「生涯のある時期における時間の心理的長さは、年齢の逆数に比例する」そうで、さらに、「主観的に記憶される年月の長さは、年少者にはより長く、年長者にはより短く評価される」のだそうです。つまりは、私は、五十二歳であります。私にとつての二年は、人生の五十二分の二になります。そう考えますと、私の二年は、五歳の十年に匹敵(ひつてき)することとなります。ですから、人生が長くなければなるほど、心理的に二年が早く感じるのだそうです。しかしながら、「時がたつのが早い」と悔やむより、加齢と共に加速するのが必然ならば、前向きに受け止め、「一日一生」の思いで生活をするよう心掛けることの方が、よりよい生活、生活の質の向上、クオリティ オブ ライフのような気がしませんか。

◇苦しく辛い時間は長く、逆に安楽で楽しい時間は短く、心配したり不幸な時を過ごす時間は長く、夢中になっている時や幸せな時間は短く感じますよね。年を重ねることに、少しずつ幸せに暮らせるようになるからこそ、時のたつのもそれと同じようにすこしずつ早くなっていく、そんな日々でありたいと願うものであります。今月の十二日は、東日本大震災より三年の歳月を迎えます。今もなお、避難所での生活を余儀なくされている人々の時間は、どのように流れたでしょうか。それを思うと、心がしめつけられます。

◇厳しさと慈しみあふれる優しさを併せもっているのが、大自然の営みで、われわれは、大自然の中で生かされて生きているのです。そうであるとするならば、天地(あめつち)の恵みを恐れ敬い、そして、今ここにある命に感謝をして、その感謝の心を、同じ場所に住んでいる人々とつなぎ愛する、そこに、運命共同体としての地域社会が築き上げられるのではないのでしょうか。皆様方の暮らしが、春の季節のように、のびやかに、時間が少しも変わらずにゆつくりと流れていきますように、お祈り申し上げます。

第九十四号 (平成二十六年四月十五日)

◇寒の戻りだったのでしょうか、急に冷え込みました。冷たい雨に、満開だった境内の桜も、とうとう、葉桜になりました。次なる季節のために、惜しみなく花びらを散らす桜、折節(おりふし)の移ろいのためには必要不可欠な自己犠牲(じこぎせい)なのであります。私どもはいつまでも散らさずに、美しく咲いてほしいと、散りゆく花びらに「儂(はかない)人生」を重なり合わせ、移りゆく季節を惜しみますよね。実は、その惜しむ気持ちこそ、「仁(じん)」でありまして、優しさ思いやりです。そして、桜の花びらの潔い(さぎよ)さが、「義(ぎ)」でありまして、相手のために自らを犠牲にする心映(こころばえ)であります。まさに、季節の移ろいは、「仁義(じんぎ)」で、成り立っているのです。桜の花びらが散らなければ、葉は、新緑にならず、夏は来ませんよね。その新緑が、やがて色づかなければ秋は来ませんし、葉をも散らさなければ冬は来ないのであります。

◇今年の冬は、殊(こと)の外(ほか)寒さ厳しきものがありました。まさに「休眠打破(きゅううみんだは)」でありまして、寒さが厳しければ厳しいほど、例年とかわりなく美しい花をつけた、桜の花にあやからねばなりませんよね。

◇さて、日本人は、宗教に対して無頓着(むとんちゃく)であると言われますが、それは、クリスマスケーキを食べて、除夜の鐘を聞き、神社に初詣(はつもうで)をするという年末の行事にも象徴されていますよね。知らず知らずの内に、他宗教の行事を日本的な行事に仕立て上げているわけです。それは、宗教に対して無頓着というよりは、寛容(かんよう)だともいえるでしょう。私は、宗教とは、有限(ゆうげん)の生を、無限(むげん)の生に変えしめるものだと考えています。人間の死亡率は百パーセント、遅かれ早かれ、必ず死を迎えます。死を永遠の命に変える事が出来るのが宗教で、いわゆる、どの宗教で死者を弔(なぐさ)うか、そして、祖先の御霊(みたま)として、どのような宗教でお慰(なぐさ)むるか。それが、宗教であろうと思うのです。誤解されているのが、「祭」であります。村の鎮守の神様のお祭りではありません。実は、亡くなった方を慰ぶ儀式でありまして、仏教でいうところの法要であります。そう考えますとですね、宗教は、読んで字のごとく、家が示す教えでありまして、その家が死者を弔(なぐさ)うための儀式を行い、さらに、死の悲しみからの回復を図りつづけた日数(ひかず)の儀式を行うやり方が、実は、その家の宗教なのです。日本人は、そのことが当たり前のように行われていて、宗教というものを意識してこなかったのでしょうか。

◇宗教を大きく分けると、世界宗教(せかいしゅうきょう)と民族宗教(みんぞくしゅうきょう)に分けられます。日常生活を通して自然発生的に成立し、祭典や儀礼を重視する信仰で、個人よりも共同体との利益を優先し、死後の世界よりも現実世界を重視するのが、民族宗教です。世界宗教は、このすべて逆の特色をもっています。死後の世界である、天国(浄土(じょうど))を重視するキリスト教やイスラム教、さらに仏教などがあります。神社神道は、日本人の宗教と言っても過言(かごん)ではありません。我々の遠い祖先は、氏神様の祭典に、まず、感謝の誠を捧げ、さらなる守護(しゆご)を祈りました。祈りは、誓いであろうと思うのです。 「理想的な生活、理想的な私たちを神様にお約束し、約束を違えないよう努力し、人の力の及ばないところは、必ずお守り下さることを信じて安らかな気持ちで生活をする、まさに、敬神生活(けいしんせいふ)ですね。その敬神生活で、「一番大切なのが「神信心(かみしんじん)」でありまして、日本人の勇気ではないのでしょうか。これからも、敬神生活をお心がけくださいまして、明るく豊かな日々でありますように、心からお祈り申し上げます。

社務目録抄

（本宮・兼務社・末社祭典厳修報告）
—平成二十六年一月～六月—

▼睦月（一月）

二日 初太鼓 歳旦祭

＊新年の幕明けを告げる大太鼓を宮司自ら打ち、早朝総代参列のもと、皇統の繁栄、五穀豊穰に併せ氏子崇敬者のご加護を祈念する最初の祭祀が斎行されました。

田ノ首八幡宮歳旦祭

福浦金刀比羅宮歳旦祭

貴布禰神社歳旦祭



三日 元始祭

＊天皇陛下御自ら宮中三殿（賢所、皇靈殿、神殿）において皇位の始源を祝し親祭あそばされました。当宮においても皇位を祝寿する祭祀を厳修致しました。

十日 彦島七神社巡拝

十二日 六連島八幡宮歳旦祭、戸別祓

十二日 どんと焼き



＊境内大広前において正月飾り、門松、書初め、古札類を忌火にて焼き上げ無病息災の祈りが捧げられました。氏子青年会により参拝者に忌火にて焼いたお餅が振る舞われました。

二十四日 彦島地区消防演習

＊「文化財防火デー」の一環行事として、総合的な消防演習を実施し、住民の文化財愛護思想の高揚を図り、近隣住民との応援体制を確立、また消防隊の現場活動技術の向上を図る事を目的とし実施されました。



▼如月（二月）

三日 節分祭

＊悪神邪気、不幸を追い払い、氏子崇敬者の招福と平安な生活を祈念申し上げました。神事終了後は、境内特設花道に於いて福豆・福餅が撒かれ賑わいをみせました。

四日 初午祭

六日 防衛省海上自衛隊敷設艦

十日 横濱DeNAベイスターズ

十日 必勝祈願祭

十日 紀元祭建国奉祝祭

十日

＊我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申し上げ、当宮神前を通して橿原神宮を遥拝致しました。

建国記念日奉祝パレード



十七日 祈年祭

＊農耕祭儀の中でも重儀としごいのまつりとも言い、今年の五穀豊穰を祈念申し上げる祭祀を厳修致しました。

二十五日 六連島八幡宮祈年祭

二十七日 田ノ首八幡宮祈年祭

▼弥生（三月）

十五日 南風泊恵比須神社例祭



二十日 春季祖霊祭

＊家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という「春分の日」の意義を継承し、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致しました。

新年御供米料奉献会社御芳名

（*順不同、敬称略）

- 池田興業(株)下関支店
- 農水フーズ(株)
- 西和建工(株)
- (株)副田工務所
- ジャパンマリン(株)
- キャボットジャパン(株)下関工場
- (株)上釜電機商会
- 三菱重工(株)下関造船所
- 下関農業協同組合彦島支所
- 青木鉄工(株)
- (株)田原工務店
- (有)エポック
- タナカ機工(有)
- (株)大庭工務店
- 西中国信用金庫西山支店
- (有)大神商店
- (有)岩原クリーニング工業所
- 古賀産業(株)
- (有)ライフクリーニング
- (有)三宅商店
- 下関酒造(株)
- 和田電機(株)
- 末次ふとん店
- 三池屋
- 松田内科クリニック
- (株)大伸運輸
- (株)下関ユアサ建材
- (株)彦島交通
- 日新リフレテック(株)
- 関門三協工業(株)
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店
- テラーしばた
- 山口県漁業協同組合彦島支店
- みなと不動産
- 植田木材(株)
- シヤデイ彦島店
- (株)広洋エレクトリック
- (株)サントー
- 大久保本店
- (株)オカダ工房
- 浜崎正俊
- (株)南国シテイタクシー
- (株)マルイチ彦島醸造工場
- (株)室田組
- (株)ナカハラプリンテックス

＊御献納賜りまして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

▼卯月(四月)

一日 勸学祭

*今春めでたく入学されました新一年生の児童生徒の皆様の学業成就・交通安全・無病息災を祈願する新入学奉告祭を厳修致しました。

五日 竹ノ子島金刀比羅宮例祭 前夜祭



六日 竹ノ子島金刀比羅宮例祭 本殿祭



九日 六連島八幡宮荒神祭
十二日 舟島神社例祭
佐々木小次郎大人命慰霊祭



二十日 彦島地区 没者慰霊祭(雨儀)

日清・日露戦争から大東亜戦争において、国のため郷土のため家族のため国の御盾となり犠牲となられた彦島地区出身の四百五十一柱の御英霊の御前にて慰霊祭を斎行致しました。

二十九日 昭和祭

*激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥と国家の繁栄を祈念申し上げます。



▼皇月(五月)

四日 塩竈神社例祭

*彦島塩浜町には江戸時代後期まで塩田があり、塩の製造が行われていました。その塩田の守護神として祀った塩竈神社の年に一度の例祭を、氏子の皆様方と厳修致しました。御祭神の塩椎神(しおつちのかみ)は、海の神様で塩の精製法を伝授された神様です。『古事記』で

い名前の「しおつち」は「潮つ霊」

「潮つ路」であり、潮流を司る神として崇められ、古来より航海安全のご利益があると伝えられています。



五日 立夏更衣祭

十七日 福浦金刀比羅宮例祭前夜祭

十八日 福浦金刀比羅宮例祭本殿祭

▼水無月(六月)

十日 海士郷恵比須神社 夏越祭 御座船選出神占神事



三十日 水無月大祓式

*カヤとヨモギが神秘的な除災の力を有するという故事に倣い、氏子奉賛会の行事委員の皆様が奉製した「茅の輪」を潜り、上半期の罪穢れを人形にうつし、祓の神事を厳修致しました。

平成二十六年

節分祭御協賛会社御芳名

平成二十六年節分祭斎行にあたりまして左記の通り多大な御協賛を賜りました。

(*順不同、敬称略)

【設営協賛の部】

▼舞台花道設営 (株)新原工業

▼照明設備 (有)タツミ電工

【協賛金の部】

下関三井化学(株)

彦島製錬(株)

キャボットジャパン(株)下関工場

オルネクスジャパン(株)下関工場

三菱重工業(株)下関造船所

サンセイ(株)下関工場

日新リフレテック(株)

下関唐戸魚市場(株)

協立運輸商事(株)

池田興業(株)下関支店

下関菱重興産(株)

西和建工(株)

(株)岡本鉄工

ジャパンマリン(株)

青木鉄工(株)

(株)田原工務店

タナカ機工(有)

(株)西京銀行彦島支店

西中国信用金庫西山支店

(株)山口銀行彦島支店

(株)ナカハラプリンテックス

格別なるご芳心衷心より御礼申

上げます。





彦島八幡宮社報「産土」に寄せて

下関市長 中尾 友 昭

まずは、この度、彦島八幡宮社報「産土」に寄稿の栄を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。また、彦島地区の皆様方には、平素より市政各般にわたりご理解ご協力賜り、深く感謝申し上げます。

さて、本年度は、一市四町の合併により新生・下関市が誕生して十周年を迎えます。その節目となる本年は午年でありますが、駿馬のごとく、現下の情勢に適切に対応し、市民の安全・安心の確保と活力あるまちづくりを進めてまいります。

これまで「市民起点」と「地域内分権」を基本に、様々な取組を行ってまいりましたが、これからの五年、十年先を見据えたとき、「少子・高齢化への対応」、「市民の安全・安心の確保」、「下関の雇用・産業力の拡大」、「行財政改革の推進」などの課題に、今後さらに集中的、重点的に取り組まなければならないと考えております。そこで、今年度は、市政経営のキーワードを「元氣・飛躍！下関」とし、「地域内分権の推進」、「交流人口の拡大」、「公共施設マネジメントの推進」、「新下関市合併十周年記念事業」を四つの重点テーマを設定して、集中的な取り組みを行い、わがふるさと下関の「元氣づくり」を進めてまいります。

まちが「元氣」になるためには、さらに地域内分権を推し進める必要があります。市民ひとり一人が、地域の発展に主体的に関わり、地域力創造の取り組みを進めることが、それぞれ地域の活力が向上に繋がるものと考えています。

また、まちの賑わいを創出するためには、交流人口の拡大も必要な要素となります。「観光交流都市 下関市」の構築に向けて、交流人口千万人、宿泊客百万人を目指しています。

あるかぼーと地区のアミューズメント施設や飲食店の開業に続き、下関駅周辺地区は、本年三月に「JR下関駅ビル」が完成し、七月にはシネマコンプレックスも開業いたします。このように下関駅周辺をはじめ中心市街地がダイナミックに変貌を遂げているところです。

これからも、市民の皆様が、元氣で将来に希望の持てるまちづくりを進め、下関のまちの発展のために全力を尽くしてまいります。彦島地区の皆様におかれましては、地域社会の発展のために、なお一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、彦島八幡宮、並びに彦島地区の今後益々のご発展と、彦島地区の皆様方のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。拙稿の結びとさせていただきます。



彦島八幡宮社報「産土」に寄稿

下関市議会議員 小熊坂 孝司

彦島八幡宮境内見て歩き

子供の頃、よく遊んだ境内ではあるが、あらためて、見て回った。表参道より境内に入る。

表参道とは、三池屋本店前の鳥居をくぐり稲葉酒店さん前の鳥居跡までの通りと聞いている。

境内に入るとすぐ右手に、仁徳天皇を 御祭神とする雨乞いの神、若宮様があります。迫町の氏神様でもあります。傍らに水を司る神様、水神社があります。ここで拝礼をし、手水舎へむかい、身を清め、楼門をくぐる。市内でも数社しか存在しない左右に守護神を奉安した隨身門形式な見事な楼門である。いざ拝殿へと、二拝二拍手二拝の後、木製の御神馬に触れ神社社会館の瑞鳳殿へ向かう、玄関手前を左に降りる、先ず、右手に古代文字ペトログラフが有り、氏名、生年月日を唱え二拝二拍手一拝、左手には、狛犬に守られた撰社、五穀豊穡の神、大歳神社があり、更に広場に出ると、宮之原遺跡、小学校の社会科見学で土器を掘った思い出がある、今では考えられない、ここに古代の社会があったと思うと心が躍る。次に、仲哀天皇の足跡を表す碑がある、日本書紀の中に、穴門、引島とあるが穴戸は長門では無く、関門の大瀬戸、小瀬戸を表しているのではないか、勿論引島は彦島であることは周知の事実である。

日本書紀の仲哀天皇記には、御座船を現在の彦島八幡宮の地に奉迎して八尺瓊、白銅鏡、十握剣を献じて戦勝を祈ったという記載が残るなど歴史とロマンに満ちた彦島八幡宮は郷土の誇りである。

また、桜並木の傍らには大東亜戦争で殉職された彦島の御霊が祀られています。今日の平和を享受しているのは戦死された方々の犠牲の上にあることを忘れてはなりません英霊に感謝と、哀悼の意を捧げ、後にする、

西方面の歩道を回り込むと、宮之原老人いこの家が見えてくる、囲碁を打つ音が聞こえてきそうだが、下関市も来年には三人一人が六十五歳以上になる、高齢化社会に向けて、安心できる社会を作ることが喫緊の課題であると、心を新たに境内を後にした。

以上、境内の見て歩きでしたが、みなさんも歩いてみてみませんか。産土神様との新しい出会いがあると思います。

末社便り

福浦金刀比羅宮例祭厳修

去る五月十八日(日)に福浦金刀比羅宮の一年に一度の例祭を斎行致しました。本殿祭厳修後に、福浦町内隈なく、御神輿による御神幸祭があり、夕暮れ間近には、伊勢音頭にあわせ、御神輿を海中にて練るといいう大変珍しい光景のもと盛儀の内に幕を閉じました。



彦島福浦町(富観台)に鎮座し、「日本」の急勾配と称えられる二七九段の参道階段は見事でありす。江戸時代には、下関が北前船の寄港地であった影響を受け、風待宿場として福浦港に多くの船が行き交いました。その際、海上安全を祈願するなど、当時から海運漁業関係者の篤い崇敬を受けてきました。また、幕末海防調査を依頼された吉田松陰が訪れ、鎮座地の要塞としての重要性を説いた史実が残ります。また、現在一の鳥居(石段下)の左手には小規模ながら稲荷社が祀られ、商工業関係者の崇敬篤く、地元氏子世話人会を中心に両社ともに護持されています。



氏青だより

去る六月七日(土)に第四十七回 中国地区氏子青年・神道青年 合同研修会(主題「神社が繋ぐ人と伝統」が鳥取県米子市の皆生グラントホテル天水におきまして開催されました。往路の道中、現在、柴田宮司子息が奉職中の出雲最古の八幡宮「平濱八幡宮(武内神社)」へ昇殿参拝のご神縁を賜りました。

初日は、皇學館大学教授 櫻井治男先生による「つながりの中におられる神様」地域から考える現代社会と神社、「アルビレックス新潟会長・古町愛宕神社宮司 池田弘先生による『神社と地域活性化』と題して講演が開催されました。

翌日は、和田御崎神社へ昇殿参拝し、水木しげるロードを散策しての解散となりました。

復路の道中では、昨年平成の大遷宮を厳修された出雲大社へ参拝がかない、稔多き研修旅行となりました。



『国宝 大神社展』を拝観して

彦島八幡宮維蘇志会 角家 清文

去る三月二日(日)に、柴田宮司、河野総代長以下八幡宮関係団体総勢約六十人で『国宝 大神社展』の拝観に九州国立博物館へ参りました。昨年、伊勢神宮式年遷宮や出雲大社平成の大遷宮が滞りなく斎行され、空前絶後の神社へ注目が集まった年の余韻が冷めやらぬ中での貴重な機会でありました。

古来より自然の中に人知を越えたものを感じ、山、川、岩、木などに神を見出し、畏れ敬ってきた先人。やがて神々を祀る神社が各地に創建され、ご神宝やご神像等々が作られ奉安され今日まで大切に残されてきました。

此の度、今まで映像や写真等々でしか拝見できなかった貴重な数々を拝観する事が叶い、眼福の限りでありました。鎮守の杜で感知する「気」と同様に、多くの展示品から「ご神威」を拝受できました。有難く忝く率直に思った次第であります。多くの国宝重要文化財を目の当たりにし圧倒されましたが、自然と引き込まれ手をあわせたくなる感動は忘れる事ができません。

又、拝観を終えた後、太宰府天満宮の古式ゆかしい「曲水の宴」とよばれる祓祓の神事を参観致しました。普段見る事のない十二単衣はじめ平安装束に身をつんだ参宴者の雅な姿に博物館拝観に引き続き感動致しました。帰関途中のバス車内では、尊さを感じする大切さが神社護持に繋がると改めて感じた大変有意義な拝観研修でした。



伊勢神宮「おかげどし」を迎えて

伊勢神宮式年遷宮が斎行されました翌年は「おかげどし」と呼ばれています。

両正宮の遷御の儀が厳修され伝統的精神文化の蘇りが図られました。現在もなお、残る月讀宮以下十二の別宮の遷御の準備が着々と進められています（〜平成二十七年三月）。

御蔭年上半期に、両正宮に関連する祭祀行事をご紹介致します。



「劍璽ご動座」の儀

天皇皇后両陛下におかせられましたは、去る三月二十五日、伊勢神宮御親拝に伴い三重県に行幸啓あそばし、第六十一回式年遷宮後の平成六年御親拝から二十二年ぶりに「劍璽ご動座」の儀を厳修あそばされました。

劍璽とは、皇位継承の証として受け継がれる三種の神器（八咫鏡・天叢雲劍・八坂瓊勾玉）の内、神剣である天叢雲劍と神璽である八尺瓊勾玉を併せた総称です。常時は、御所内 天皇陛下の御寝所に隣接する土壁に囲まれた塗籠の劍璽の間に奉安されています。

神宮参拝のご案内
(おかげどしに伊勢路へ)
〜新しく蘇りがはかられた御正宮に拝し、日本人の心のふるさつを感じませんか?〜

▼内宮(皇大神宮)
御祭神：天照大御神
御神徳：皇室の御祖先の神様で、我が国でも最も貴く、国家の最高神とされ日本人の総氏神様として崇められています。

五十鈴川

▼外宮(豊受大神宮)
御祭神：豊受大御神
御神徳：「受＝うけ」とは食物のことで、食物・穀物を司り衣食住をはじめすべての産業の守り神様として崇められています。

せんぐう館

▼公共交通機関(アクセス)

日本各地から伊勢神宮へのアクセスを考えた場合、名古屋もしくは大阪を目指し、そこからJRまたは近鉄線を利用する経路が便利です。伊勢市内へ到着後の交通手段はタクシー・路線バス・レンタカー・徒歩と様々ですので、滞在時間を考慮しながら移動される事をおすすめ致します。

■電車利用の場合

近鉄特急	京都駅	→宇治山田駅	2時間10分
近鉄特急	大阪・上本町駅	→宇治山田駅	1時間50分
近鉄特急	名古屋駅	→宇治山田駅	1時間30分
JR快速	名古屋駅	→伊勢市駅	1時間37分

■駅からの移動

内宮	<近鉄>宇治山田駅からバス15分
外宮	<JR・近鉄>伊勢市駅から徒歩5分(600m)

■お車利用の場合

内宮	<伊勢自動車道>伊勢インターまたは伊勢西インターより5分
外宮	<伊勢自動車道>伊勢西インター

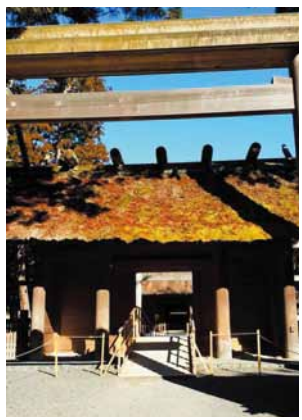
豊受大神宮(外宮)古殿地拝観

神宮の両御正宮と各別宮は、東西に同じ広さの敷地を持ち、前回の遷宮まで社殿が建っていた敷地を古殿地と呼び、古



【イメージ画像】

先の大戦以前は、天皇陛下が、お泊りがけで行幸啓され皇居をお離れになる際、侍従が劍璽を携えて随行する「劍璽ご動座」の儀が執行されてきましたが、戦後全国への行幸啓が増加し、警備上の観点などから、昭和二十一年六月の千葉県行幸啓を最後に取りやめられておりました。しかし、昭和四十九年、先帝 昭和天皇さまが式年遷宮に伴い伊勢神宮を御親拝あそばされた際、この儀式が復活致しました。以来、今上陛下の御即位後も、即位の礼と大嘗祭厳修を奉告あそばされる「御親調の儀」、さらには前回の式年遷宮後のご親拝でもご動座が受け継がれ、肅々と執り行われた経緯があります。此の度におきましても、「劍璽は天皇陛下とともにあるのが大原則」という言葉に象徴されるが如く、随行される侍従御二方が劍璽を恭しく持つ姿に感銘を受けた次第です。



い社殿の跡には石組みが残され、中央には清浄神秘な「心の御柱」と称される忌柱の覆い屋が設けられます。遷宮の諸祭が始まると遷御までの間は、同じ敷地を新御敷地と呼びかえます。

遷御の儀が厳修された昨年十月より本年三月まで、外宮に限り、古殿地の拝観が許可されました。敷地内が解体される前に拝することが出来る、大変貴重な機会であります。

次回式年遷宮遷御の儀以降は、皇大神宮(内宮)に限り拝観が予定されており、後になります。西行が参宮の折に詠んだと伝承される和歌『なにごのおはしらすかはしらねどもかたじけなきに涙こぼるる』どなたさまがいらっしやるのかよくはわかりませんが、おそれ多くてありがたくて、ただただ涙があふれ出て止まりません)を身近で体感できる貴重な機会として、一人でも多くの方に知っていただければ幸いです。

山口県神社庁下関支部主催 伊勢神宮参宮旅行に参加して

彦島八幡宮奉賛会 顧問 成瀬 武夫

平成二十六年三月七日より三月九日まで二泊三日の行程で、伊勢神宮参宮旅行に参加させて頂きました。

昨年、平成二十五年は二十一年に一度の「第六十二回神宮式年遷宮」斎行の奉祝の年に当たり、種々の行事が執行されました。

平成十八年、十九年の「御木曳き行事」、昨年八月に斎行された「お白石持ち行事」には参加奉仕する事が出来ず、一度は必ず伊勢神宮に参拝したいと考えていましたところ、山口県神社庁下関支部主催の伊勢神宮参宮旅行に参加する事が出来て感慨無量でありました。

初日三月七日は、午後伊勢に入り早速、豊受大神宮(外宮)を参拝、外宮まがたま池のほとりに新しく出来た「式年遷宮記念・せんぐう館」を拝観、神社造営の技術・古代の工芸美を学びました。

二日目の三月八日は、いよいよ皇室の御祖神である皇大神宮(内宮)を参拝致しました。五十鈴川に架けられた宇治橋を渡り、おこそかな気持ちで玉砂利を歩き、全国各地から参集された大勢の参拝者に驚きながら御正宮に到着しました。一般の御参拝者は御垣の外からお参りでしたが、私達は神社庁の御配慮により畏れ多くも御垣内にて参拝する事が出来、且つ又内宮の神楽殿において、御神楽を奉納させて頂き感激致しました。

三日目の三月九日は、日本の火防ぎの神「秋葉神社」に参拝して、次に焼津漁業者の安全・大漁を祈願する「焼津神社」に参拝して最後に、昨年世界文化遺産に登録されました富士山・本宮浅間大社に参拝して帰路につきました。

我が国の総氏神様がお祀りされている伊勢の神宮に参拝出来たことは、生涯忘れることの出来ない事であり、私、個人と共に日本国民全てが伊勢神宮を崇拝して日本の国が更に素晴らしい国となります様、祈願して止みません。



八幡様の知恵袋 その二十九

幣帛・御幣と大麻(大幣)の役割

幣帛とは、神様に奉る捧げものの総称です。勿論、皆様が奉るお米やお酒、玉串料といったものも幣帛といえます。

広義では、玉串や神饌等々含まれますが、「元来」幣や「帛」は布を意味して神様に対する最高貴重な捧げものとして位置づけられていました。真新しい布を、神様の神衣(衣服)として奉納する事により、そのご神威を仰いだのです。

時代の変遷とともに、白色をはじめ五色の紙(紙垂)や金箔・銀箔が代用され柳などの木の串に挟みお供えすることが定着して、今日の御幣の形になりました。木の串は、神様の神籬または依代(憑依した物)、挟んだ紙垂は神様の神衣を意味していることとなります。皆様も、神社へ参拝の折、社殿内でお見かけになったことがあると思います。

一方、大麻は、神職がお祓いの際に用いる被具としてよく知られています。神職が左、右、左の順で振り神饌、玉串や参拝者をお清めする姿を思い浮かべて下さい。被串とよばれる木の棒に紙垂や麻

紐を垂らしたものと、実際の柳などの常緑樹の枝に紙垂や麻紐を垂らしたものと二種類が一般的です。御幣と同じく神様の宿る神聖な神籬には、罪穢れを祓い浄める大いなる力が発動する所以、大麻として被具に転化したことも肯けると思えます。

当宮においても福月御幣として、一年各月毎に五色、金銀種々の色の紙垂を用いた御幣を社頭にて頒布致しております。会社、ご家庭の神棚(床の間)をはじめ清浄な場所へお祀りして、そのご加護をお受け下さい。



御神馬と絵馬

皆様は当宮の御神馬をご存知ですか？楼門を潜つて右手廻廊に隣接する神馬舎に木製の御神馬像が奉安されています。

神馬とは、「元来」神様が「お乗りになる馬」の事を指しますが、広義には、諸祈願や雨乞いなどで神社に奉納された馬も含め、神社に関わる全ての馬の総称です。馬の種類には特段決まりはなく、古来から馬は神様の乗り物として神聖視され、神様(神霊)が馬に乗り降臨されるものと大事にされてきました。

神様が参拝者の祈願を成就するおはたらきの神業や、御神幸で神社を離れる際にお乗りになる馬は欠かせません。その為多くの神社が境内の神馬舎などに生馬や馬像を奉安しています。

なお、同様に御神輿も神輿舎に納め、御神馬の役割を担います。奈良時代の正史『続日本紀』には神馬を奉納する記載が残り、これ以降慣習になった事が窺えます。平安時代の法令集『延喜式』第三卷二十六条には大変興味深い神馬の記載が残ります。雨を願うときには黒毛の馬を、晴れを願うときには白毛馬をそれぞれ献納するというのです。



また、中世の武士社会では、戦勝を祈願するために神馬を奉納したなど、その時代により意味合いも変化する傾向もありました。しかし、小規模な神社では世話や維持が

重荷となること、一方高価であり献納する側にとっても大きな負担となることから、次第に板に馬の絵を描いたり、木や紙・土で作った馬の像で代用するなど変遷を経て絵馬が定着するようになったのです。

絵馬も奈良時代以降、当初は神馬を描く物だけでしたが、室町時代になると奉納する神社にご神縁ある動物や、三十六歌仙とよばれる平安時代の和歌の名人、更には武者絵等々様々なものが描かれるようになりました。

安土桃山時代では、狩野派や長谷川派・海北派など著名な絵師による本格的な絵馬が人気となり、それらを展示する絵馬堂も建てられるなど神社の境内に絵馬鑑賞の一種の美術館的な建物が多く見受けられるようになりました。

さらに江戸時代以降、家内安全や商売繁盛といった実利的な願いをする風習が広まり、今日のように個人が小さな絵馬を奉納する形が始まりました。対照的におかげ参りの『伊勢神宮参拝記念』や戦時中の『戦勝祈願』などの大型絵馬を多人数で奉納する場合もありました。

以上のように「なぜ馬がいるんだろう?」、「なぜ絵馬を書くの?」実は意外にご存知ではない方も多いのではないかと察します。今年(今年)は午年なので、この機会に干支の午に肖り、ご参拝の折に御神馬に触れたり、絵馬を奉納されてみてはいかがでしょう。身近な神社で、悠久からの年輪を紐解くこともご神縁を深める事に繋がると思います。



祭事暦

（平成二十六年下半年期）
皆様お誘いあわせの上、
お気軽にご参拝下さい。

月次祭

毎月1日・15日

※本殿前にて皆様方に終日「御神供米」をおわかち致しております。

朝粥会

毎月21日午前6時30分

※誕生月の方全員に玉串拜礼をしていただきます。四季折々のお粥をご賞味下さい。



文月（七月）

九日 六連島八幡宮七社祭

七つの祠（全て石造りのちいさな社）の世話人がお供え物と注連縄を持参し、順次祭典を執行。終了した者から自分のおもりする社に参拝し、注連縄と御神体の衣を替えます。これを「オキヌ替え」と称します。お供え物は、祭典前日、井戸を替その若水にて炊いた麦の団子と麦の粉をその若水でねった物を椿の葉にのせ、青竹の箸をそえた十二膳という特殊神饌です。

十五日 竹ノ子島天満宮例祭

彦島唯一の天神様です

二十四日 田ノ首八幡宮夏越祭

二十五日 六連島八幡宮夏越祭・戸別祓

二十九日 夏越大祓式・菅拔神事

人形に氏名・年齢・男女の別を記入（※車形の場合は、車のNo.プレートも記入）し、息を三回吹きかけ、分魂を宿らせます。こちらを当日までに社務所までご持参下さい。ご持参いただいた人形を、神職がお焚き上げし、半年間の生活の中で気付かぬ内に身に付いてしまった罪やけがれ穢を悉く祓い清めます。

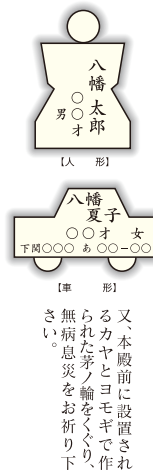
※人形並びに車形は社頭に無料頒布致しております。社務所までお気軽にお申出下さい。

三十日 夏越祭本殿祭・御神幸祭

海上渡御

彦島各町内におみこしをお駐めし、会社、工場を始め皆様方のご安全、ご繁栄を祈願致します。

次頁の順路と予定時刻表をご参照の上、最寄の御旅所にておみこしにお参り戴きますようご案内申し上げます。



葉月（八月）

三十一日 海士郷恵比須神社夏越祭

詳細は夏休み前に、運営委員会より彦島地区各小学校に配布されます申込パンフレットをご参照下さい。

中旬 神道家中元祭



夏越大祓

夏越大祓並びに茅ノ輪菅拔神事

七月二十九日（火）午後五時斎行

茅ノ輪をくぐり身についた罪穢れを祓い清めましょう



サイ上り神事

山口県無形民俗文化財指定
十月十九日（日）午後三時頃境内大広前にて斎行

彦島開拓の主祖、彦島八幡宮創祀者河野通次に思いを馳せ彦島原点の神事を参観致しますよう



まほろば学級

八月三日（日）午前十時開講式

夏休みの思い出に鎮守の杜で一日を過ごしてみませんか



平家踊り

撰社若宮さん奉納
九月五日（金）～六日（土）例祭神事（五日）午後五時 平家踊り（五～六日）午後七時

平家ゆかりの彦島に縁深き下関の伝統芸能「平家踊り」



長月 (九月)

五日 若宮神社例祭・奉納平家踊り
中旬 貴布禰神社例祭
二十三日 秋分祭秋季祖霊祭

「祖先を敬い、亡くなられた人を偲ぶ日」という「秋分の日」にちなみ、家族の最も身近な祖霊に節目節目の祭儀を斎行致し、祖先の御霊に追慕の誠を捧げ、其の御加護を祈念致しております。

下旬 観月祭

神無月 (十月)

四日 六連島八幡宮例祭前夜祭・湯立神事

本殿裏にて忌火で沸かした湯に藁(わら)の輪飾に青竹に挟んだ人形(ひとかた)を四体立て、御幣で掻き混ぜた後、柄杓にて一杯すくい神前に献湯する特殊神事です。神事終了後この神湯を戴き、無病息災を祈ります。

五日 六連島八幡宮例祭本殿祭・御神幸祭

十一日 田ノ首八幡宮例祭前夜祭

十二日 田ノ首八幡宮例祭本殿祭・御神幸祭

敬神婦人会境内清掃活動

十七日 神嘗奉祝祭

十八日 秋季例大祭・前夜祭

彦島ふく鍋

福引大会 (空クジなし/豪華景品多数!)

奉納芸能大会 (各種奉納イベント開催)

バザー&露天 神社絵画展覧会

生花展示会

十九日 秋季例大祭・本殿祭・御神幸祭
無形民俗文化財「サイ上り神事」午後三時

彦島歴史ウォーク (午前八時三〇分受付開始)

奉納剣道大会 子供神輿練歩

彦島ふく鍋
福引大会 (空クジなし/豪華景品多数!)

霜月 (十一月)

上旬 懸崖・菊花展

三日 明治祭

明治天皇さまのご生誕とご聖業を讃えるとともに、ご皇室の更なるご繁栄を祈願する祭事です。

十五日 七五三祭

二十三日 新嘗祭

新穀を御神前へお供え致し、本年の収穫を天神地祇(八百万の神々)に感謝申し上げます。

二十五日 六連島八幡宮新嘗祭

師走 (十二月)

三日 祈漁祭

通称「ボラ祭り」とも言い、ボラ漁解禁の日に因み、大漁祈願と海上安全祈願を齎行致します。

七日 大注連縄奉製・煤払式

本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄を総代関係者にて奉製致します。

二十三日 天長祭

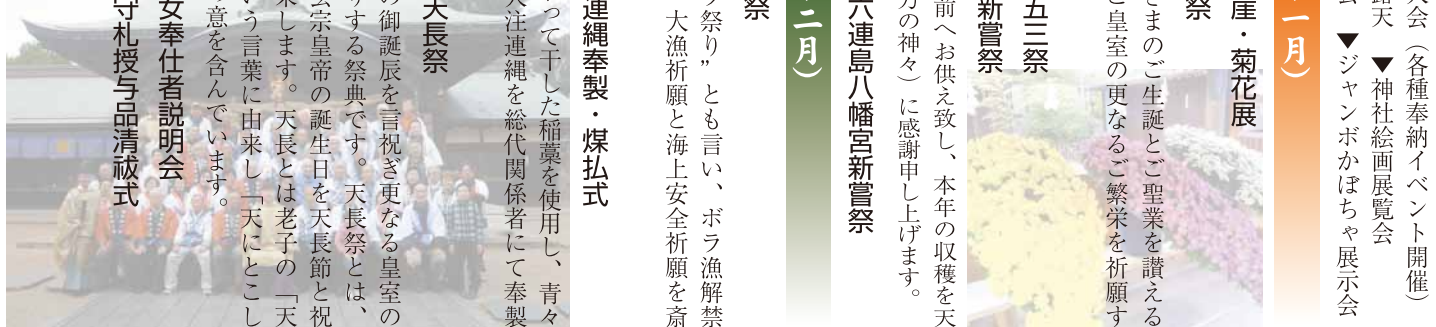
今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

正月臨時巫女奉仕者説明会

三十一日 守札授与品清祓式

大祓式

除夜祭



夏越祭 御神幸順路と予定時刻【7/30日(水)】

本宮御発興 → 正面鳥居左折 → 下関三井化学内 → 三井化学前信号を直進 → 十二苗垣墳墓 → 卯月峠經由 → 本村四つ角を右折 → 後山
8:00 8:05 8:05 8:25
ジョイフル彦島店裏側坂を上り進行 → みやぎ理容院を右折 → 南国マンション・山口整形前交差点 → 県道を横断 江の浦2丁目坂を
8:35
直進 → 関門トンネル上を右へ → 塩谷公園横を通過 福浦2町へ → 日ポリ産業前 → 山口三菱自動車角右折進行 → 日本歯科薬品前 →
8:05 8:55
福浦橋を渡り塩浜へ → 塩浜町民館前 → サンデン彦島営業所内 → 大通りを進行 県道横断向井町を經由 山中町民館前 引き返し桜ヶ丘
9:10 9:20 9:40
入口より峠を越し弟子待徳岡商店横を直進 → 日本グリース昭和八幡前 引き返し → 弟子待町民館前 → 弟子待を出て 弟子待保育園 を
10:00 10:15 10:30
下り左折 → 芳無田公園方向へ右折進行 → なかべ学院 → 舟倉町民館方向へ → 舟倉公園 → 福浦口山口銀行前 → 杉田信号を右に進行
10:45 11:00
→ 三菱至誠寮前を左に上り江の浦8丁目中通を進み県道に出て右折 → 下関菱重興産前 → 三菱下船工場内 → 江の浦町民館前 →
11:20 11:30 12:00

サンセイ下関工場内 12:20 昼食 (於、本村公会堂 TEL266-2219) 12:40~13:50

出発 → 老町 → 貴布禰神社階段下 → 海士郷恵比須神社前「漁協彦島支店にて海上渡御準備」出船 漁港内一周 小戸口、
12:20 14:10 14:25 15:00
彦島大橋下を抜け ヒコットランドマリナーズ沖を通過

(西日本有数の御座船による“海上渡御”)

南風泊魚市場岸壁に上陸 → 魚市場前 漁協南風泊支店前 → 県道右折竹の子島に渡り前田造船所前 引返し → 西山町自治会館 → 彦島
15:35 15:45 15:50 16:10 16:10
製錬 → 県道右折進行 → 八幡宮前通過 → キャボットジャパン引き返し → 荒田、絞バス停車前を左へ上り旧道を進行 → 彦島豆腐工
15:55
場前を通り県道を右へ → サンリブ彦島迫町店 → 本宮御還幸
17:10 17:20

— :修祓(一旦停止)箇所 〇 :お旅所(祭典、小休止)箇所

神前結婚式のご案内

〜結びれし 二人の門出は 八幡宮の本殿にて 美しく雅やかな結婚式を〜

神前にて共に生きることを誓う、人生における最も重要な儀礼を、神聖な社殿で執行してみませんか。神道における最上の「産霊（むすひ）」行為を実践し、日本の伝統「和の心」を継承致しましょう。



一〇〇名様対応の披露宴会場もあり、隣接の神社会館「瑞鳳殿」にて挙行できます。

※詳細は社務所までお問い合わせ下さい。

お食事・仕出し（御弁当）はお任せ下さい

彦島八幡宮会館 瑞鳳殿の御案内

お友達やご家族との会食、披露宴、新年会、忘年会、歓送迎会、結納、各種懇親会、年祭・法要等全てに対応しております。仕出し等の各種弁当も用意できます。ご予算献立等詳細はご連絡下さい。完全予約制です。ご予約承下さい。ふぐ、くじら、あんこう等々下関ならではの幸を使用した会席も、ご好評頂いております。予約センター連絡先 TEL〇八三二二三四一〇七三二（午前十時三十分〜）

※社務所にも受付けておりますのでお気軽にご相談下さい。

*洋ホール二〜一〇〇名様まで対応

*和室十二畳（※六畳一部屋）

*和室二十畳（※十畳二部屋）

【和室会席の場合 定員三十五名】



御祈願、昇殿参拝について

▼神社参拝の折のお供え（御祈願料）

祝儀袋に「御玉串料」もしくは「御初穂料」と毛筆し納めるのが丁寧です。その際、祈願主（代表者）の氏名を下段に書きます。その他のお供え（米、酒、菓子等）には「奉納」や「奉献」というのし（熨斗）をつけます。

▼祈願中の心構え

神殿内では、静かに心を落ち着かせ姿勢を正します。祝詞奏上やお清めを受ける際は、ご低頭（腰を折り頭を下げる）下さい。玉串拝礼の作法 神職から代表者が玉串を両手で受け取り、

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名「子安八幡」とも称され、安産の神様としても崇められております。

腹帯をお清めされ、安産祈願祭を斎行されますことをご案内申し上げます。各自腹帯もしくはマタニティガードル等をご持参下さい。当宮の安産守護の御朱印を御押印させていただきます。古来より戌（犬）はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習が伝承されております。懐妊五ヶ月が過ぎた最初の戌の日を選ぶ地方が全国的に多く見受けられます。

御守、命名の掛け軸（誕生の証）を撤

七五三参拝の御案内

左記の通り、今年七五三をお迎えになるお子様を御家族の方共々にお祝い申し上げます。お守り、千歳飴、知恵おこし、おもちゃをご用意致して、ご参拝をお持ち申し上げます。



下品におつけいたします。命名の毛筆（墨書）は、当宮宮司自ら謹筆致しますので、お気軽にお申し出ください。

*平成二十六年下半年の戌の日を表記いたしますのでご参照下さい。

7月	2日(水)	安	安
	14日(月)	大	大
	26日(土)	大	大
8月	7日(木)	赤	赤
	19日(火)	赤	赤
	31日(日)	友	引
9月	12日(金)	先	負
	24日(水)	先	負
10月	6日(月)	先	負
	18日(土)	秋	祭
	30日(木)	先	負
11月	11日(火)	先	負
	23日(日)	新	嘗
12月	5日(金)	大	大
	17日(水)	大	大

数え年表記です

▼三歳 平成二十四年生まれの男子・女子

※古くは鬢髻と言ひ、頭髪を伸ばし始める歳です。

▼五歳 平成二十二年生まれの男子

※古くは袴着と言ひ、袴を着用し始める歳です。

▼七歳 平成二十年生まれの女子

※古くは帯解と言ひ、大人の帯を用い始める歳です。

彦島八幡宮ペトログラフ

古代文字（シュメール文字）が刻銘された巨岩が注連縄結界のもと奉安されています。

自然崇拜にもとづく神宿る聖なる磐に神様を感じ、神様の威大なる力を戴いて下さい。近年海外含め、全国より参拝者が来宮されます。元来石版として文字を刻む為の岩であった事が有力視されていますが、

その後雨乞いや豊作祈願などの祭りが執行された際、ご神体として崇めたり、人が登ったり私的に粗末に扱ったりすると崇る事例などから神聖な場所に安置したりと何らかの形で祭祀と密接な磐として変遷し今日に現存しています。ご参拝の折には是非ご拝観下さい。



編集後記

「神様」というと人間の姿をした神々、人格神を連想してしまいがちですが、悠久の太古、先人はたなつもの、「みもの神の神の神」の御坂（ごみさか）とき穀物や杉や坂そのものに神様を感じて見ました。万物に神様はお宿りになる。時には山が神であり、海、川、森、谷、巨岩が神様として信仰され、人々は神様の懐で調和して生活を営んでまいりました。

自然に対する畏敬の念は、四季ある風土と共に先人が築いてこられた信仰、生活の水車軸と文化、言動の垂直軸との構造の中に、我々の血脈と心と共に生き続けています。日本人の信仰の原点は、自然万物ありとあらゆるものに感謝、おかげさまの気持ちを持つことにあります。御利益信仰以前に我々現代人は、日々原点回帰により、そこに自然との調和を育まなければなりません。下半期も始まりましたが、自然の恩恵により営み成すことが出来る事を再確認し、感謝の祈りを捧げて円環する。正に稲穂が頭を垂れるが如く謙虚な姿勢で、有難い日々を積み重ねて参りたいものです。末筆乍ら残りの御蔭年も、皆様方のご健勝ご多幸、更には稔り多き下半年期であらん事を祈りし、編集の結びと致します。

発行所 彦島八幡宮社務所
〒下関市彦島追町五丁目十二番九号
TEL 〇八三二二六六一〇七〇〇
FAX 〇八三二二六六一五九一一
ホームページ http://www.hikoshina-gu.net
編集者 山本 光 徳 夫
平成二十六年七月一日
印刷 ㈱ナカハラプリンテックス